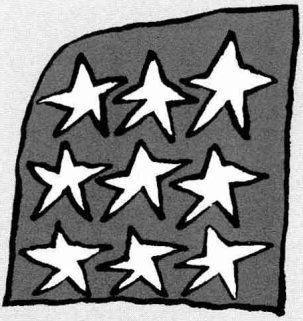
# アメリカ人の血と気質

安岡章太郎



# アメリカ人の血と気質

安岡章太郎

アメリカ人の血と気質

一九七七年九月一〇日　第一版印刷
一九七七年九月二五日　第一版発行

定　価　七八〇円

著　者　安岡章太郎

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇　郵便番号一〇一
電話　二三〇―六三六一（出版部）二三〇―六一七一（販売部）

印刷所　中央精版印刷株式会社

© S. YASUOKA, Printed in Japan, 1977

0095-772103-3041

著者との了解により検印は廃止します
乱丁・落丁の本はお取り替えします

目次

アメリカ人の血と気質　対談　安岡章太郎　ケネス・リチャード――5
変容する〝アメリカ像〟　異邦人の中のアメリカ　アメリカン・リッチの苦悩　天皇・キング・貴族　ケベック気質　追いつめられたアメリカの〝辺境〟　コミューンの破産と黙想時代の到来　人種差別と『ソウル』　黒人問題と地域性　アメリカの中の日本人
アメリカの歴史感覚――149
ブリストヴィルの午後（戯曲）――161
あとがき――194

装幀　池田満寿夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# アメリカ人の血と気質

# アメリカ人の血と気質——《対談》

安岡章太郎
ケネス・リチャード
日本学者。1940年シアトル生れ。ワシントン大学卒。現トロント大学助教授。

## 変容する〝アメリカ像〟

**リチャード**　こんどの旅行は、サンフランシスコからはじまって、グルッと大回りし、サンフランシスコに帰ってきたわけですが、最初、アメリカへ着いたのは、何時でしたか。

**安岡**　サンフランシスコに着いたのは、何時だったのかな。もう、覚えていませんねェ。

**リチャード**　シアトルのホテルにはいったのが、たしか、午後一時過ぎでしたね。

**安岡**　そうだったかな。とにかく、サンフランシスコでシアトル行きの便に乗り替える時間が、ちょっとありましたからね、安心していました。ところが、カバンがなかなか出てこなかったりなんかして、大あわてにあわてたんだ。で、ちょうど、出口に女のコが立っていましてね。背の高いコだったな。きっとアイルランド人かもしれないね、あれは。

彼女が、事情を聞いて、じゃ、わたしが案内するからといって、先頭に立ってどんどん駆け出して。走り方が、日本人とちがうんだよね。日本人は、まっすぐ走るけど、彼女の走り方は、飛びながら走るんだ。こう、髪の毛が全部上へと向いて……。トウモロコシがねェ（笑い）。しかも、ものすごく背が高いだろう。足が、走ってる感じなんだな。

**リチャード**　ああ、そう。

**安岡**　従業員の通るドアの前にくると、〝ジス・イズ・ア・シークレット・ドア〟とかいって、そこを走り抜けるわけ。そのとき、ボストンへ急ぐ日本人も一緒だったんだけど、彼女は、〝フー・イズ・ボストン〟とかいってね（笑い）。ありゃ、なんか、非常にアメリカ人らしかったな。

安岡章太郎　1976

**リチャード**　ワタクシは、この前、六月に日本に行きましたでしょう。前は、日本に近づきますと、ドキドキしたんです。でも、こんどは、全然平気でした。『GORO』の人が迎えにきてくれていたんですが、〝ああ、そうですか〟というようなことで、平気でしたよ。その点、安岡サンは、アメリカに近づいてきたとき、どういう感じでしたか。

**安岡**　こんどは、リチャードさんと一緒でしょう。だから、ほとんど日本を歩いているのと、気分的には変わらなかった。

**リチャード**　それでは、ガッカリしましたか。

**安岡**　いや、ガッカリはしなかった。ぼくは、英語ができませんけど、気分的に変わらなかったんだな、国内旅行と。たとえば、シアトルに着いた日、リチャードさんの両親に会ったでしょう。ぼくは、普通、知らない外人と会うと、とても苦痛ですよね。が、こんどは、全然そういうことがなかったから。

これはひとつには、アメリカと日本が近くなったということもあるけど、アレじゃないかな、あなたが、日本語ができるということ、やっぱり、これが大きいですね、理由としては。

**リチャード**　たとえば、十六年前のアメリカと日本では、経済的に非常にズレがあった。日本は、昔、一生懸命でしたね。しかし、いまは、日本、すごく落ち着いている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

**安岡**　現在の日本が？

**リチャード**　ええ。だから、ワタシがドキドキしないで、平気で入国できるんですね。経済的な状態は、アメリカとほぼ同じぐらいになってるんじゃないですか、日本は。

**安岡**　かなりの程度、レベルが追いついているかもしれないね。

**リチャード**　それから、こんどの旅行では、いろんな人たちとつき合いましたが……なんていうんですか、イバッて〝アメリカは世界一の国ですよ〟〝アナタは、アメリカ、好きですか〟とか、〝アメリカはどうですか〟――と、あまり聞かなかったでしょう。

**安岡**　聞かない。

**リチャード**　もはや、そういうことは、いう必要がないんですね。二百年祭を迎えて、なるべくお客を歓迎しようという、ムードもあるしね。だいいち、アメリカが観光地になってきている。昔は、アメリカ人が世界中に旅行しましたが、いまは、逆に、どんどん客がはいってくるのですからね。アメリカが、観光地になる時代がきたんです。

ケネス・リチャード氏

**安岡**　そうねェ、これは、でも、なんともいえないな。事実、サンフランシスコの日本航空の人も、今年はヨーロッパへ行く人よりも、アメリカ本土へくる人のほうがずっと多いといっていたよね。けど、これは、一種の流行ですからね。まア、ぼ

く自身についていえば、アメリカというのはどこの土地も同じで、食べ物もホットドッグとハンバーガーだけ……と思っていましたけど、今回の旅行は、プログラムがよくできていたせいか、じつに変化があった。食べ物も、かなりうまかったな。シアトルの鮭なんか、最初から食べたいと思っていたものだけど、じっさい、よかったよね、あのサーモン・ステーキも。

**リチャード**　そうですか。

**安岡**　それと、今回はカナダのケベックへもいったでしょう。ケベックの田舎料理も、うまかったよね。オリンピックでモントリオールへいった人も多かったようだけど、ケベックまで足をのばせば、これはちょっとアレだな、ほんとうに落ち着いた昔の田舎のヨーロッパをみつけたんじゃないかね。

それはともかく、最初にいったシアトルの話をすると、リチャードさんのお父さんとお母さん、これは典型的な中産階級のアメリカ人というのかな。

**リチャード**　そうですね。

**安岡**　たいへんほほえましい夫婦だと思いましたけど、ひとりで住んでいた叔母さんがいたでしょう。あの人は、どういう人ですか。

**リチャード**　うん、あの人は、結婚して、長い間奥さんをしていました。子ども、ワタシにとって従兄弟ですが、ふたりいます。両方とも、大学を卒業し、長男が工学士ですね。いま高速道路の設計の仕事とかで、ワシントン州政府で働いているんです。次男は、哲学をやっています。

**安岡**　そうですか。

**リチャード**　彼女は、わりときれいな顔で、ほんとうに親切ですよね。だけど、精神的には非常に厳しかったんです、以前は――。

ワタクシのリチャード家というのは、一代にひとりぐらいイエズス会の神父になるのが習慣でした。何代も前からのね。それで、次男が哲学に向いていたので、大学院にいれてムリヤリ勉強させたわけです。神父になるためにね。ところが、ワタクシはいまだに理解できませんが、彼は急に勉強をやめて、飼っていた一匹の犬を連れて帰ってきたんです。勉強していたトロントからね。帰ってきて、彼はすぐ結婚し、神父になることをやめたんですよ。そこには、非常に悲劇があったんですね。精神的な面で、悩んだらしいのですけど、彼女は、なにもいわないです。おカネをあげたりして……。

**安岡**　ジェズイット（イエズス会）の神父になるのが、いちばんむずかしいんでしょう。

**リチャード**　十四年ぐらいかかりますよね。大学院、神学校を出て、それから教会の手伝いをしてあちこち歩き、イエズス会の博士号をとるまでには、ね。

**安岡**　たいへんなんだよね。ぼくは、ギャラガーという人を知っているけど。

**リチャード**　マイケル・ギャラガーね。

**安岡**　彼はイエズス会で、上智大学にきて、あと半年で神父になれるというときにやめたんだ。野坂昭如の『エロ事師たち』なんかを翻訳し、非常に恥じていましたけど。ワタシは、『エロ事師たち』を訳したいために、神父をやめるのではない、とかいって（笑い）。愉快な男なんだけど、ともかく、リチャードさんの従兄弟にかぎらず、カトリックを勉強している人たちというのは、なんか、ひとつの壁にぶつかってるんじゃないですか。

**リチャード**　ワタクシもぶつかりました。

**安岡**　日本でいえば、遠藤周作が簡単にぶつかりましたけどね。彼は、カトリックはやめないけど、およそカトリックとは思えないような文章を書いてますよね。

**リチャード**　ええ。

**安岡**　中国では、文化大革命というものがあったでしょう。ソビエトでは、雪どけというものがあったよね。つまり、社会主義国の中では、社会主義政治そのものについて、疑問というか、混乱が起こっている。それに似ているのが、ぼくは、カトリックだと思うんだ。カトリック社会にも、似たようなことが起こっている、と。日本では〝第二公会議〟といってますが、あの前後から、カトリックの内部、信者も含めて、これまでのカトリックでいいかどうか……というので、一種の革命が起こったんじゃないですかね。

**リチャード**　要するに、一般の人にもわかるようにと、ラテン語をやめて、いろんな言語を使うようになったりしたわけですね。ある意味では、〝第二公会議〟というのは、一般化といいますか、あるいは、平凡さというのですか……。

**安岡**　ああ、通俗化ね。

**リチャード**　そう。しかし、アメリカの場合、カトリック教信者がふえたか減ったかは別として、信者で教会へいく人が減りましたよ。ワタクシも、もう、ほとんどいかない。

**安岡**　あの叔母さんなんかは、教会にいってるんですか。

**リチャード**　彼女は、毎朝毎朝、いそいそと出かけていましたよ、昔は。いまは、いってませんね。やめたわけじゃないんですけど、ほとんどいかないんです。

　あのォ、話を戻しますけど、叔母の主人というのは、イギリス生まれなんです。イギリスとアイルランドの海峡にある、マンクス（マン島）という小さな島の出身なんですね。このマンクスという島は、いまだに中世の文化が残ってますけど、有名なのはネコですね。マンクス・キャットといって、

非常に敏感なんです。尾がなくて。島の名物はいいですけど（笑い）、民族としてはブラック・アイリッシュといいますか、真っ黒の髪に、目は茶色。

**安岡**　アイリッシュというのは、ケルト族でしたよね。ケルト族の純粋なのですか、そのブラック・アイリッシュは。

**リチャード**　純粋なものです。

**安岡**　ははァん。

**リチャード**　この叔母の主人は、たいへん厳しかったんです。ワタクシ、たっぷり思い出があります。その方は、ジョンソンというんですが、車の事故で頭がおかしくなったんですね。年寄りになりますと、血管が硬くなる……。えーと、動脈硬化。あれが、事件のあと案外早くきて、元気だったのが、髪は白くなるし、痩せてしまって。十年近く生きていましたけど、叔母は、非常に苦労したらしいのですね。

**安岡**　看護のために？

**リチャード**　そうです。彼女は、主人が亡くなったあと、シアトルにきたんですね。彼女が住んでいたのは、シアトル市内ではなく、ブレーメールトンというところ――戦争中に軍艦をつくっていたところです。太平洋戦争に使った軍艦、ミズリー号なんかも、そこにありますよ。彼女は、シアトルのアパートに住んで、仕事を探し、最初、カトリックの高校で料理仕事をするんです。その後、もう少しいい仕事がないか、と。彼女は、アンビシャスですからね。それで、大学の賄婦になり、さらに大学の秘書となったんですよ。

ちょうど、ワタシが大学に入学したころ、彼女はゴージャスなアパートに住み、国際留学生とか国

際クラブとか……。

**安岡**　面倒みてた？

**リチャード**　面倒みてたわけですね。そのころは、夜中の三時や四時までガヤガヤやって、彼女のアパートは喫茶店のようになっていたんです。とくに、中国人と日本人の留学生が、いついってもいるんです。そのとき、叔母からいろんな日本人を紹介してもらいました。

**安岡**　そのせいだろうな。彼女の、あのホスピタリティというのかな、世話好きなのは。

**リチャード**　そのせいですよ。そのころから世話好きだったんです。

**安岡**　日本にも、世話好きのおばさんというのはいっぱいいるけど、あの人は、大学で働いていたせいか、知的なんだなァ。インテレクチュアルですよ。

**リチャード**　教育はない。でも、教養はありますよ。

**安岡**　教養はあるねェ。

**リチャード**　彼女には、友だちがいっぱいいるんです。マドリッドにも、ローマにも、日本にも、韓国にもね。

彼女は、そういう友だちの誕生日を手帳に書いているんです。それは、百人以上ですよ。それで、毎年、暦にその誕生日を書き込んで、ファイルをつくり、今日はだれの誕生日とかいって、手紙を書くんですね。それが、彼女の非常なよろこびなんです。

**安岡**　あの人は、何歳ですか。

**リチャード**　六十六のハズです。

**安岡**　そうですか。彼女は、いい意味での色気があるよねェ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com